

熊本県の豊後街道沿いにおける民家の調査・研究

主査 伊東 龍一*¹

委員 小野 将史*²

本研究は、熊本県の民家に関する基本的な資料を整えることを目的として、藩主が参勤交代の折にも使用した豊後街道沿いの民家を調査し、現存民家の調査結果と蒐集した古記録や絵図から、町家、農家、郷土住宅や、藩主休息のための御茶屋などのデータを提示した。とくに大津町の郷土住宅は大型で、江戸時代に遡る上質の住宅が多く、その祖型は、近隣に存在した平行二棟造とは異なる系統の住宅であろうこと、波野の農家は、建物中央にオモテと呼ばれる大きな部屋をもつ点で街道沿いの他地域の民家とは系統が異なること、御茶屋に準ずる休息施設が存在すること等、を明らかにした。

キーワード : 1) 民家, 2) 郷土住宅, 3) 町家, 4) 御茶屋, 5) 大工, 6) 街道,
7) 平面, 8) 意匠

A STUDY OF THE TRADITIONAL HOUSES ALONG BUNGO HIGHWAY OF KUMAMOTO

Ch. Ryuichi Ito

Mem. Masashi Ono

By this study, We conducted the field survey on the traditional houses along Bungo highway and, as a result, showed data such as the house of the rich farmers / the general farmhouses / the town houses / the tea houses for the feudal lord. And I clarified two points of next in particular.

1. The houses of the rich farmers of Otsu-cho are large, and there are many good-quality houses, and the archetype is different from 'Futatsu-ya style' which there was in a neighborhood.
2. One tea houses and one rest institution which followed it exists

1. 調査の目的

熊本県の民家については、主に松井昌幸・白木小三郎・青山賢信・太田静六・吉田靖・北野隆・原田聡明・宮澤智士・澤村仁・大岡敏昭らの多くの調査・研究がある^{注1)}。しかし、二棟造、あるいは二ツ家と呼称される分棟型民家に焦点が当てられることが多く、そうでない場合も断片的に紹介されたり、市町村史において、当該地域の概況が報告されたりするのに留まることが多かった。この二棟造の民家の問題は、極めて興味深い問題ではあるが、基礎資料となる県全域における民家の現存状況や、その平面や構造・意匠について十分明らかにする必要があると考える。

そこで、今回の調査・研究は、今後の民家研究の基礎資料となるようなデータを積み重ねる作業と位置付けた。しかしながら、時間的制約がある中で、ある程度の成果を上げるためには、まずは地域を限定する必要があったため、ここでは、かつての豊後街道沿いの民家を、現在の熊本県の範囲で調査・研究することとした。

熊本県の豊後街道は、熊本藩主・細川家が参勤交代の折、使用した街道である。主に江戸からの帰り道に使用し、船で鶴崎へついた後に通る街道であった。また、豊後の鶴崎から熊本までのルートのひとつが当藩の藩領であった。したがって、人や物資の移動は、豊後・肥後を横断する街道の長さから予想されるものよりはるかに容易であったと考えられる。したがって、人や物資の移動が建築にいかに関与しているのかについても検討することになる。

2. 研究の方法

旧豊後街道が通過する熊本県内の市町村は、熊本市・菊陽町・大津町・阿蘇市(旧阿蘇町・旧一ノ宮町・旧波野村・旧産山村)の各市町村である。まずは、熊本県文化課のご協力で、これらの市町村の社会教育課等の担当課へ連絡して頂き、民家のリストを上げていただくようお願いした。民家は、江戸時代を中心に、戦前までを対象とする農家・町家としたが、その中には、結果的に藩主参勤交代の際に休

*¹ 熊本大学 助教授

*² 塩田町教育委員会(当時、熊本大学 研究生)

息や宿泊にあてた御茶屋の遺構も含まれることになった。これに、市町村史等に紹介された民家を加え、リストを作成し、市町村を通じて調査依頼を行い、了解の得られたものについて調査を行った。

調査内容は、現状平面・現状断面図（梁間方向）・痕跡調査と復元平面・棟札や絵図などの資料調査・写真撮影、聞き取り調査である。

しかしながら、結果的には、民家リストにあがった民家数は予想したほど多くはなかった。調査の了解を得られた家はさらに限定されたものとなることが予想されたので、極力その欠を絵図や古記録で補うこととした。

3. 豊後街道の状況

豊後街道のルートは、熊本城下から東へ向かい、大津へ至り、ここからやや登り道になりながら高尾野から二重峠を越えて阿蘇外輪山の西南からその内部へ入り、内牧、宮地、坂梨といった外輪山内部の集落を通して、再び東側の外輪山を越えて豊後へ向かうというものである^{註2)}。

参勤交代においては、朝、城を発った一行は、大津の大津御茶屋で休憩をとり、阿蘇外輪山の中にある内牧の御茶屋で宿泊している。豊後街道には、藩主の休憩等のために藩が造った御茶屋が、この他にも二つあった。内牧の手前の石的御茶屋と、外輪山の内部ではあるが内牧より先にある坂梨御茶屋である。

大津と坂梨は、現在の熊本県の範囲内における豊後街道の主要な宿場町である。また、坂梨の手前には、阿蘇神社の門前町として宮地があった。

豊後街道は、近代に入って、大正3年（1914）の豊肥線の熊本・肥後大津間の開通や新しい道路の開通^{註3)}で大きく変貌を余儀なくされ、後述するように、これらの宿場町やそれを構成する民家・町家にも大きな影響を与えている。

4. 調査対象民家とその分布

前述のような方法で、調査を実施できた民家は、表4-1の通りである。建物は、21棟である。郷士の住宅が6棟、農家が8棟、町家が5棟、御茶屋が2棟である。

郷士は、細川藩独自の呼称で「在御家人」とされる^{註4)}、農民層の最上層に位置し、寸志（献金）によってその地位を得た者である。この家柄の住宅は、周辺的一般農家に比して、規模が大きく、式台や長押・欄間などの造作は格段と上質である。

地域的にみると、大きな特色は、郷士の住宅が大津宿の南に位置する「陣内」・「森」・「下町」・「大林」・「町」といった、豊後街道と阿蘇から流れ出る白川との間に挟まれる集落に数多く散在する点である。

また、農家は、いずれの地域にもみられるが、当然のことながら町家は、かつての宿場であった大津・坂梨だけみられる。さらに、御茶屋の遺構が、阿蘇の石的にその一部が

残り、御茶屋とは呼称されなかったものの、藩主のために造営された御居間が狩尾の坂梨家に残される。

5. 郷士の住宅

5. 1 郷士住宅の形式

大津の現存民家には、街道沿いの町家や周辺部の草葺民家と共に、街道からやや奥まって位置する「陣内」・「森」・「下町」・「大林」・「町」といった集落に、大型の郷士住宅が確認できた。すでにこの地域における江藤武紀家（国指定重要文化財）・岡本家（県指定文化財）といった住宅の存在は知られていたが、他に4棟の郷士住宅を確認し、これについても調査を行った。調査を行ったのは次の住宅である。

江藤武紀家

本来当家は、豊後大友家の家臣であったが、初代武左衛門（元禄4年（1691）没）の代に現在地に出てきたという。3代兵左衛門が一領一疋を天明3年（1783）仰せつけられたのをはじめとして、以後寸志（献金）によって、当藩において「在御家人」と称される郷士となっている。

建物は、一部に二階をもつ、切妻造・瓦葺・平入で、大きな土間に対し、ヒロマ・チャノマ・ダイドコロを一列に配し、表のヒロマからは、角座敷を出して、ブツマ・ザシキを治めている。現在は、ザシキにもう一部屋ザシキと呼ばれる部屋が続く、ブツマ前に茶室があるが、これは増築で、ブツマ前に式台が復元できる。またこの角座敷と平行に、チャノマ・ダイドコロから中の部屋2室が角となって延びる。これに接して北側に、もう一つの角があるが、これも増築によるものである。

障壁画の意匠は華やかで、土間の架構はダイナミックである。ヒロマ二階の天井棹縁から文政13年（1830）の墨書が発見され、建設年代が確定した。大工は地元の清左衛門であった^{註5)}。

岡本定昭家

天保11年（1840）の建設が、棟札で明らかである。大きな土間にヒロマ・チャノマ・ヘヤは一列に並び、ヒロマからは角座敷を出してブツマ・ザシキをおさめる。

坂本正次家

「安永九年春子二〇中旬建立」の墨書のある部材があり、土間の框に使われていたというが、形状から棟木あるいは角木として使用されたもので、現在の建物の形式は、そこまでは遡らない。しかし、大型で、表側にオモテ・ブツマ・ザシキを並べ、ザシキを突出させる形式は、間違いなくこの地域の郷士住宅のもので、角釘の使用も認められ、江戸期に遡ることは確実である。他の住宅が仏壇の床を一段高くするのと異なり畳上端に揃える。

西本ヒツイ家

比較的小型ではあるが、表側にオモテ・ブツマ・ザシキを並べた住宅である。

角釘が使用される。文政2年（1819）の棟札があったとき

れるが実見できていない。

江藤則彦家

大型で、表側にオモテ・ブツマ・ザシキを並べるのは同じで、背後にもう一本角を出す。角釘が使用されている。

太田黒敏朗家

表側にオモテ・ブツマ・ザシキを並べる。ザシキを8畳とするのは西本家と同じでやや小さい。角釘を使用する。

江戸期に遡る郷土住宅で、年代が確定する最も古いのは、文政13年(1830)の江藤武紀家で、ついで天保11年(1840)建設(棟札)の岡本定昭家住宅となる。年代が古いと思われるが、さらに詳細な検討を必要とするのが坂本正次家住宅である。貫を縦横に多用する小屋組は古風である。続い

て文政2年の棟札(未見)があったという西本ヒツイ家住宅、江藤則彦家、太田黒敏朗家住宅(幕末期)と続く。

これらの江戸時代の郷土住宅には、定まった形式がある。木造・一部二階建、瓦葺、平入で、大きな土間をとって、表には大戸を設ける。土間に沿って表側にオモテ(ヒロマ)、裏にカッテ(チャノマ)の2室、あるいはこれに1室を加えた3室を並べる。表側上手には、式台を備え、かつ式台正面にブツマ、そして床・棚・付書院の座敷飾をもつザシキを配する。

このブツマ・ザシキは、土間やオモテ・カッテからなる主体部とは別に突出部(角屋)を形成する場合が多い(岡本家・坂本家・大田黒家・江藤則彦家)。また、これらには

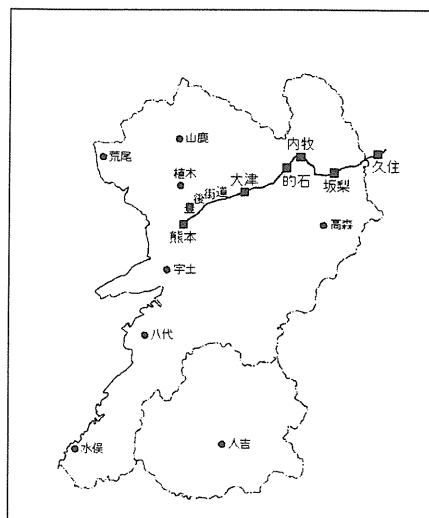


図 4-1 豊後街道の位置

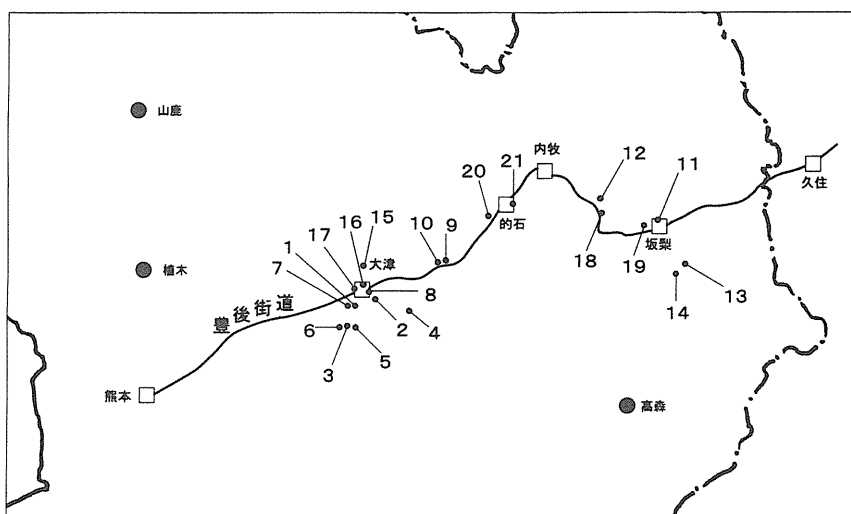


図 4-2 調査民家位置図(図中の番号は表 4-1 の番号に対応)

表 4-1 調査対象民家一覧

	名称	所在地	建築年	種類	屋根	備考
1	江藤武紀家	大津町 陣内1652	文政13年(1830)	郷土	瓦葺	
2	岡本定昭家	大津町 森265	天保11年(1840)	郷土	瓦葺	
3	坂本正次家	大津町 下町190	幕末	郷土	瓦葺	安永9年(1780)の年紀部材残るが転用材か
4	西本ヒツイ家	大津町 大林582	幕末	郷土	瓦葺	文政2年(1819)の棟札があったというが未見
5	江藤則彦家	大津町 町169	幕末	郷土	瓦葺	仏壇裏筋から裏角に一体に架ける
6	大田黒敏朗家	大津町 下町210	幕末	郷土	瓦葺	
7	松岡博継家	大津町 陣内1679	幕末	農家	瓦葺	式台は14、15年前につくる
8	手嶋靖隆家	大津町 引水523	明治38年(1905)	農家	瓦葺	本格的2階をもつ古い例
9	府内靖次郎家	大津町 高尾野245	明治27年(1894)	農家	瓦葺	矢野家後、同じ大工が建てる。
10	矢野桂吾家	大津町 高尾野19	明治27年(1894)	農家	瓦葺	明治27年の大火後の建築
11	市原朔雄家	阿蘇市 一の宮町坂梨891	明治2年(1869)	庄屋(武家)	瓦葺	かつてのお茶屋はやや西側(現畑地)にあったという。
12	佐藤哲志家	阿蘇市 一の宮町中通186	明治後期	農家	瓦葺	
13	榎木野不羈夫家	阿蘇市 波野大字波野2550	安政6年(1859)	農家(武家)	茅葺	大型茅葺住宅。玄関付。武士にのみ許された酒造も行う。四国の大工。
14	岩下政命家	阿蘇市 波野大字波野411	大正時代	農家	茅葺	茅葺。四国の大工
15	武田征伍家	大津町 大津766	江戸時代	町家	瓦葺	
16	U. K. 家	大津町 大津	明治18年(1885)	町家(武家)	瓦葺	
17	木野勝之家	大津町 大津1095	明治15年(1882)	町家	瓦葺	
18	吉田俊一家	阿蘇市 一の宮町宮地153	明治後期	町家	瓦葺	鶴崎の大工
19	勝 基直家	阿蘇市 一の宮町坂梨845	明治41年(1908)	町家(旅籠)	瓦葺	坂梨宿往時の旅籠屋の建物、豊肥線宮地駅が近くに出来るものと思い建替え。
20	小糸豊寛家	阿蘇市 的石536	江戸時代	御茶屋	茅葺	的石御茶屋。御居間と次の間保存
21	坂梨正章家	阿蘇市 狩尾1255	文化14年(1817)	御茶屋	茅葺	在郷地主、文化14年の母屋、明治40年座敷増築

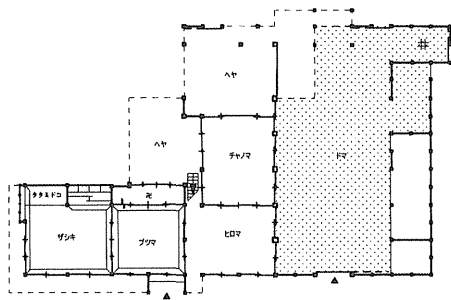


図 5-1 岡本定昭家 復原平面図



写真 5-1 岡本定昭家 外観



写真 5-2 岡本定昭家 式台

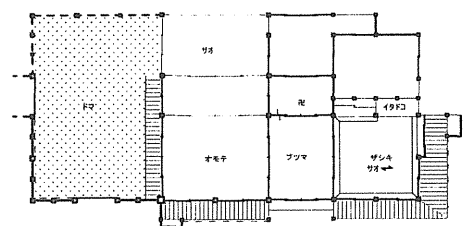


図 5-2 西本ヒツイ家 復原平面図

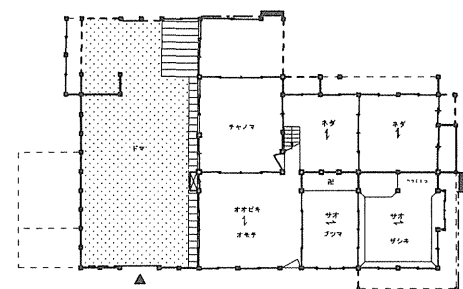


図 5-3 太田黒敏朗家 復原平面図

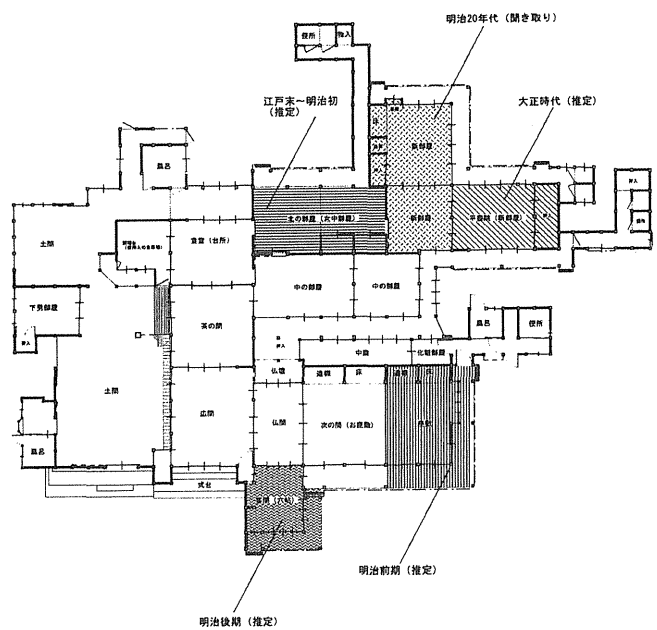


図 5-4 江藤武紀家 (現状平面にみる主な増築箇所)

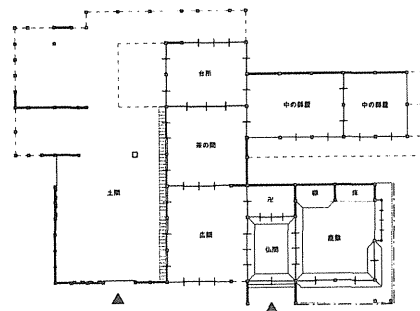


図 5-5 江藤武紀家 (創建当初の平面)

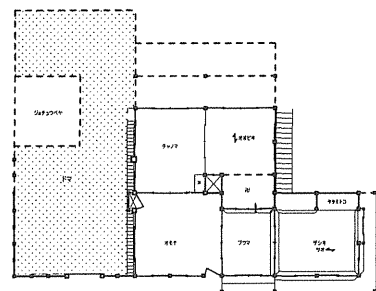


図 5-6 坂本正次家 復原平面図

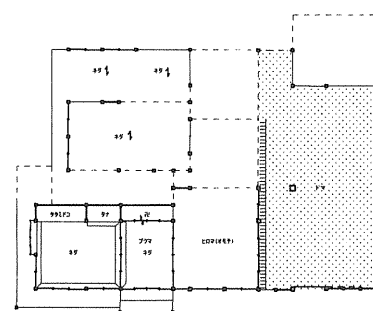


図 5-7 江藤則彦家 復原平面図



写真 5-3 太田黒敏朗家 外観

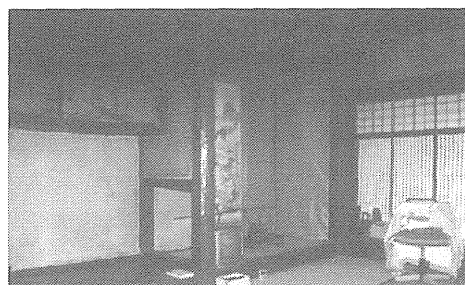


写真 5-4 太田黒敏朗家 ザシキ

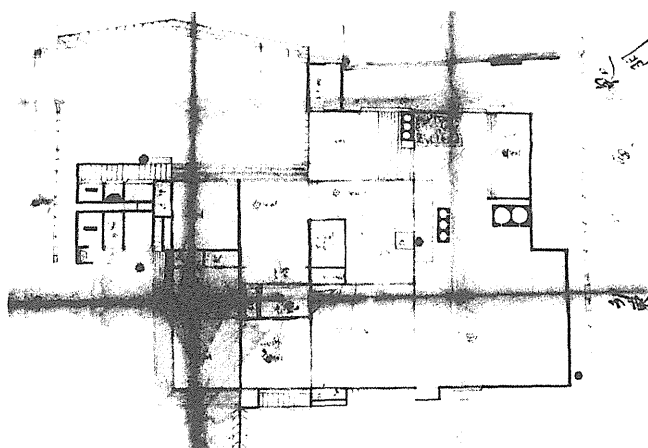


写真 5-5 大塚龍一郎家 家相図

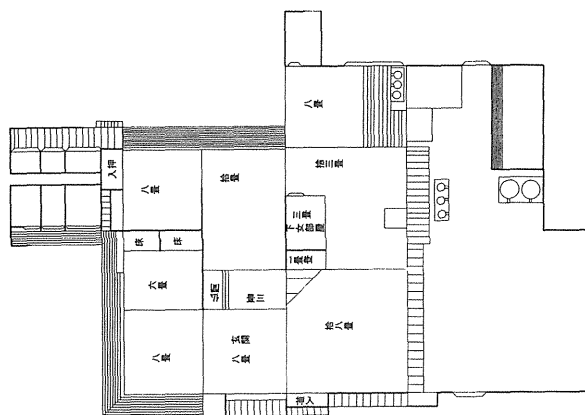


図 5-7 大塚龍一郎家家相図に描かれた平面

さらに中庭（ナカドージ）を挟んで平行に角屋を設ける場合があるが、これは使用人の部屋である。角となった座敷部や使用人の部屋は、建設後増築されている場合がある。

梁間をみると、角屋は2間であるが、土間とそれに沿ったオモテ・カッテ等で構成される主体部は2間の梁間を大きく越える。熊本県を含む九州北部の民家は、3間梁を禁じた梁間規制のために、梁間2間とするものが多い。熊本県でも寛永期に規制が出されており、梁間2間で、大きな平面を覆う屋根を形成するための手立てとして、屋根を平行に二棟架け、間に雨樋を渡す平行二棟造や、そのバリエーションが生み出されたとされる。

一般農家では、境家住宅（国指定重要文化財 文政13年1830 玉名郡玉東町）がその代表例である。梁間が大きいこれらの住宅が建つ可能性があったのはやはり江戸後期で、その頃には規制がやや緩くなったものと思われる。

また、平面は大きく異ならないが、座敷を大屋根に取り込んでいるタイプと突出させて角屋とするタイプがある。

以上のような形式をまとめたのが表5-1である。

表 5-1 郷土住宅形式一覧

名称	住所	座敷位置	釘	小座敷	仏壇	式台	建設年代	備考
江藤武紀家	陣内1652	角屋	角	○	○	○	文政13	
岡本定昭家	森265	角屋	角	○	○	○	天保11	主間奥に1間毎に柱
坂本正次家	下町190	角屋	角	○	×	○	弘化前	嘉永の半世紀前には転用材
西本ヒツシ家	大井582	内	角	○	×	?	嘉永	文政2年の棟札があったというが未見
江藤則彦家	町189	角屋	角	○	×	○	弘化前	嘉永 仏壇裏から裏角に一律に繋げる
大田黒敏朗家	町210	内	角	○	×	○	弘化前	嘉永
大塚龍一郎家	陣内1165	内	一	不明	不明	○	弘化前	嘉永4年家相図（教育委員会所蔵）による

5. 2 郷土住宅の成立

ここで注目しなくてはならないのは、その平面である。土間に沿って部屋が2室から3室並ぶ郷土住宅の平面は、この地域の一般民家とも異なり、後述する他地域である高尾野や一の宮、坂梨、波野の農家とも明らかに異なる平面を持つ。平行二棟造の平面に近く、しかもその分布域が重なる地域であることに注目する必要はあろう。

文政13年（1830）建設の江藤武紀家住宅の建設願である「奉願覚」（文政9年 1826 江藤家所蔵）には次のようにある。

奉願覚

一、買家老軒 但 六間半拾間
 右者私所持之居宅古家ニ而、最早柱朽損、
 何分ニ茂、住居難成儀ニ御座候間、追々運置申候古
 材木等を以、御書上候通之居家、此節建直申
 度奉存候間、宜敷被仰付、被下候様、奉願候、尤
 屋根等之儀者、隣家積寄居候ニ付而者、火用心
 甚無心元、其上家萱茂、無多事所柄ニ御座候間、
 瓦を以葺付方仕度奉願候、願之通御免被仰付
 被下候得者、隣家之者共火除ニ茂成、双方
 心遣も薄依利ニも相成申儀ニ御座候間、何卒
 願通御免被仰付被下候様奉願候、勿論
 御時節柄之儀ニ付、費々間敷儀等可仕様茂
 無御座、瓦を置候迄之儀ニ御座候間、此段宜敷被仰付

可被下候、為其覚書を以申上候、以上

文政九年十二月 大津手永下陣内村居住

江藤貞之丞家代

作次

右書面之通 願出候ニ付、相糺申候処

相違無御座、右様作事之儀ニ付

而者、御達之趣も御座候得共、居蔵

造ニ而者無御座候間、何卒願之通

御免被仰付可被下候様、家来共茂

奉願候、為其肩書仕上申候、以上

森村内山口

善兵衛

下陣内村

庄屋久右衛門

下村勘兵衛 殿

斉藤次左右衛門 殿

井上平左衛門 殿

河田平吉 殿

6間半に10間という規模の貫家の建設願いであり、茅(萱)も少なく、隣家への延焼をさけるために瓦葺としたこと、居蔵造ではないことを述べている。現在の住宅は瓦葺で、柱太さ等の構造も瓦葺に対応するものであって、元茅葺であった可能性は少ない。また、6間半に10間の規模については、梁間を住宅そのものの規模と捉えず、架かる梁長さと考えれば正に6間半に相当する。桁行の10間については、当初からあったと考えられるブツマ隣の座敷までに相当する。

これらから、この記録が、まさに現存住宅の建設時のものであることが明らかで、これを素直に捉えれば、文政9年当時の住宅は茅葺の住宅であったということになる。

また、わざわざ居蔵造ではないとことわっているということは、当時すでに居蔵造が普及し始めていることを意味する。居蔵造は北九州一円では、土蔵造の住宅のことを示す。現在の江藤家住宅は、完全な居蔵造ではないものの、妻内部を塗り込め、壁面を塗り込めた外観をもつ。

これらから、江藤武紀家の建設された文政9年～13年頃は、茅葺から瓦葺へ、真壁造から居蔵造へと変貌を遂げる時期ではなかったかと思われる。

さて、ここで、文政9年以前の住宅についてももう少し検討したい。

「国武中興記」(国武家所蔵)に収められた次のような書状写に、当家の住宅に関する記述がある。「合志郡陣内村兵左エ門、藤三郎一家屋式間半六間の家一軒分藤三郎替川流又は往還人夫ニ持たせ遣申候 所々ニ遣申候得は木数何程と申儀存じ奉まつらず候」(享保9年 1724)、「合志郡陣内村兵左エ門、式間半六間之家壱軒作り申候」(享保10年)とあって、兵左衛門は、江藤家3代の兵左衛門(延

享3年 1746没)と考えられるので、この頃に、2間半×6間の規模の住宅を建設していることが判明する。そして、これがおそらくは、文政9年の建設願に記された現在に残る住宅の前身建物である茅葺の家であったと考えられる。

間取りは不明であるが、奥行きが半間の押入等が付いた8畳や6畳の部屋と土間が一行に並ぶといった程度の形式を考えざるを得ない。つまり、文政13年の江藤武紀家の前身建物は、享保10年頃に建てられた茅葺の2間半×6間の建物であった。したがって、これは平行二棟造ではなかったと考えざるを得ない。

以上のような、江藤武紀家の例や、西本ヒツイ家が文政2年(1819)に建設された可能性があること、岡本家も天保11年(1840)の建設であることを勘案すると、19世紀の前半は、梁間の小さな草葺きの住宅が、瓦葺き・居蔵造の住宅へ変貌していった時期^{註6)}になるのではないかと、少なくとも大津の郷土住宅はこのころに成立したのであらうとみられる。

6. 農家

6. 1 大津の農家

松岡博継家

農家で、現在はお茶の製造を中心としている。建設年代は、角釘を使用することや、部材の経年感から江戸時代にまで遡ることは間違いない。一部二階建、瓦葺、平入で、土間と6室から成る間取で、表にオモテ・ブツマ・ザシキ、裏にチャノ他2室を配する。二階を造らない上手側(ザシキ上部)の屋根は一段低い。現在、オモテに式台が設けられているが、これは近年の改造の結果で、当初は無かった。近隣には、江藤武紀家をはじめとする一領一正の住宅が散在する地域で、間取りに共通点がみられるが、式台を持たない点が異なる。また、規模の点でも、西本ヒツイ家とはそう変わらないというものの、他の一領一正の住宅に較べるとやや小型である。

手嶋靖隆家

建設年代は、明治38年(1905)という。角釘の使用は認められず、当初から物置でない、畳敷きの居室を二階に設けている点などは、この建設年代の建物であることを裏付けるものである。二階建、入母屋造、瓦葺、平入で、一階は8畳を田の字に配する四つ間取に、土間に張り出す1室を裏の列に付加した間取りで、独立したブツマが無い。現在仏壇は、ザシキの床脇にあるが、元はその背後の部屋にあったという。

以上、この地域の農家の住宅は、一領一正の住宅に共通する部分も多いが、式台を持たず、手嶋家がやや明治期の例であるため、江戸期の間取りについてはやや不確かではあるが、独立したブツマを設けないこともあったと思われる。

6. 2 高尾野の農家

大津からの街道は上り坂になり阿蘇外輪山向かうが、その途中に位置する集落が狩尾野である。「オモテ（表）」と呼称される矢野桂吾家と「キツパシ（限端）」と呼ばれる府内靖次郎家は、かつてそれぞれ集落の最初と最後に位置する屋敷という意味であったと推定される。

矢野桂吾家

農家で、二階建・入母屋造・瓦葺・平入の建物で、大火後に建設されたと伝わる。明治期のこの地域の大火は明治27年（1894）にあつて、8軒を焼失している。洋釘を使用する建物であること、大黒柱や床廻りに樺を使用すること、差物を多用すること等を考慮するとこの大火後の建築であろう。街道側に寄って建つものの、通りとの間にやや距離をおく。土間と田の字に配された8畳4室からなり、上手表側をザシキとし、その奥をヘヤとする。

府内靖次郎家

農家で、矢野家と同じ大工が、矢野家建設の翌年の明治17年に建てたという。しかし、矢野家は、明治27年建設と考えられ、当家の洋釘の使用や差物の多用などからも、当家の建設年代は、矢野家建設後の明治27年頃と考えられる。二階建、入母屋造、瓦葺、平入は矢野家と共通するが、間取りは6間取で、表にオモテ・ブツマ・ザシキの3室を、裏手にはイマ・ヘヤ・ヘヤの3室を配し、表のブツマと裏のヘヤとの間に、板壁で囲まれる中廊下をつくる。ザシキ裏のヘヤは、イマ・ブツマからはこの中廊下を通らないと行けず、ザシキ境の襖も実は板戸で、ザシキ側に襖紙を貼っており、ヘヤ側からは猿で鍵がかかるという極めて閉鎖的な部屋である。

以上の2家の他、近隣には矢野アイ子家のようにこの2家とほぼ同年代の住宅はあるものの、これ以前に建設年代が遡るものはないと思われる。

6. 3 坂梨・一の宮の庄屋住宅・農家

市原朔雄家

当家は、宝暦3年（1753）以前は坂梨手永の惣庄屋を勤めており、家柄は武家である。藩主綱利が当家座敷で休憩したのを期に、寛文8年（1668）に座敷を解体し、御茶屋を建てるよう命じたという。これは2間半×9間の規模で、台所は、既存の建物を改築し利用したという。

現在の建物は、坂梨宿の街道からやや引っ込んだ敷地にある。明治2年（1869）に改築したといわれるが、現在の建物に大きな改築の痕跡は無く、残された御茶屋の絵図に描かれた平面とも異なるため、部材を利用した程度の新築であったと考えられる。

二階建て、切妻造、瓦葺、平入で、一階は六間取とし、表側にオモテ・ツギノマ・ザシキ、裏側にスイジバ・ナンドが配される。二階は表側を物置とし、裏手に座敷を設けている。御茶屋の平面とは異なるが、座敷飾の意匠や規模に、

江戸時代以来の家格を反映させた上質の住宅である。

佐藤哲志家

佐藤家は農業を営む。阿蘇神社門前の宮地の北、一の宮町中通にある二階建て、瓦葺、入母屋造、平入で、1階表側にオモテ・ザシキを、裏手にダイドコロ・ナンド・キタンザシキを配する。大黒柱等やザシキ廻りの柱など、要所に樺材を用い差物を多用する、洋釘を使う点などから、建設年代は明治後期とみられる。キタンザシキとザシキで寄り合いが行われたという。

6. 4 波野の農家

榎木野不羈夫家

元は武家であったといい、江戸期には酒屋を営んでいたという。茅葺（現在金属板葺）、寄棟造、平入で、雄大な外観をもち、玄関上部には入母屋破風を載せる。8間取の平面で、表側には玄関のつくオモテ・ナカザシキ・ザシキが配される。とくにオモテが18畳大と広いのが特色である。土台を入れる点も珍しい。火事で焼失後の建物と言われ、祖父俊平氏が9歳のときに建てた、すなわち安政6年建設という。

岩下政命家

農家である。住宅は茅葺、寄棟造、平入で、表側に12畳半と広いオモテと8畳のザシキ、裏手にチャノマ・ナカノマ・オクザシキを配する6間取である。オモテには式台を付ける。榎木野家同様、土台が廻る。元は比較的近隣の集落・遊雀にいた政命氏が小学校2年生のとき（昭和4年）にこの家移り住んだといい、当時この家はすでに建っていたという。大工は四国の大工と伝わる。

波野の農家は、大きなオモテを中心とする間取りや土台をもつなど、その他の住宅とは異なる顕著な特色をもつ。宮崎県側の民家との繋がりも大いに予想される。

7. 町家

7. 1 大津宿における町家

大津宿は、加藤清正以来取り組み、細川家の綱利の代になって堀川・大津間が完成した上井手と呼ばれる用水路である上井手を守るために近隣の農家をその南側の堤防沿いに建てさせたのが始まりと言われる。江戸期においては、この塘町筋が町の中心で、街道は、現在の大津中心街の北を通る上井手に沿っており、そこから狩尾野へ向かい北上していた。大津御茶屋や会所などは、こちらの北上する街道の東側にあり、さらに北の上大津には藩蔵である「御蔵」があった。

このような町並みの状況を示すものに大津惣庄屋であった斉藤家が所蔵する「大津苦竹塔迫絵図」（明和期）がある（写真6-1）。宿場町の木戸・会所や御茶屋、主要寺院の位置を確認すると共に切妻・平入の町屋が並ぶ様相が把握できる。

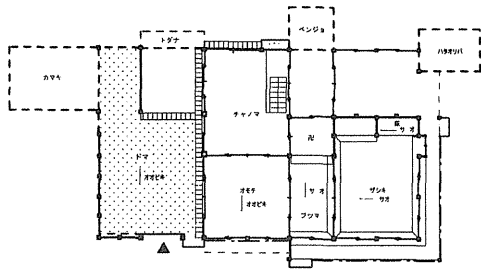


図 6-1 松岡博継家 復原平面図

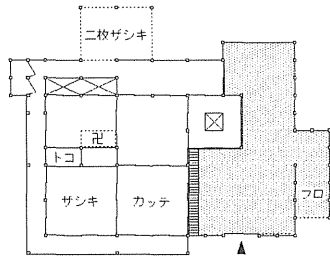


図 6-2 手嶋靖隆家 復原平面図

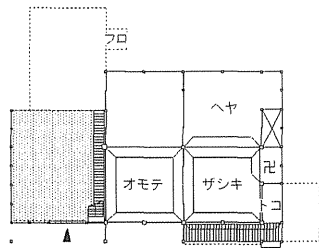


図 6-3 矢野桂吾家 復原平面図

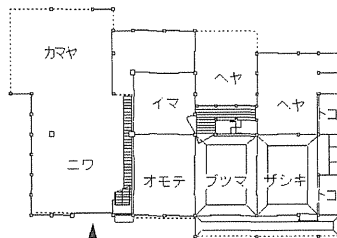


図 6-4 府内靖次郎家 復原平面図

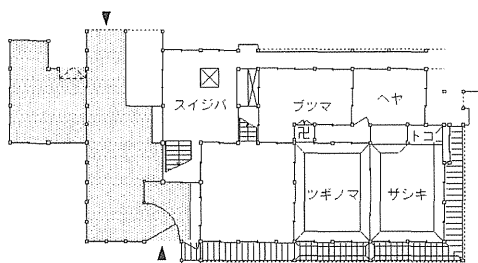


図 6-5 市原朔雄家 復原平面図



写真 6-1 矢野桂吾家 外観



写真 6-2 矢野桂吾家 ザシキ



写真 6-3 市原朔雄家 外観



写真 6-4 市原朔雄家 ザシキ

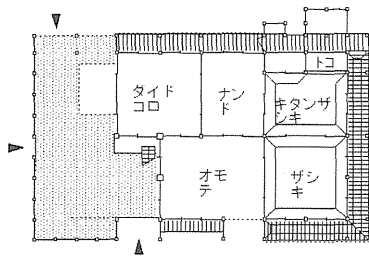


図 6-6 佐藤哲志家 復原平面図

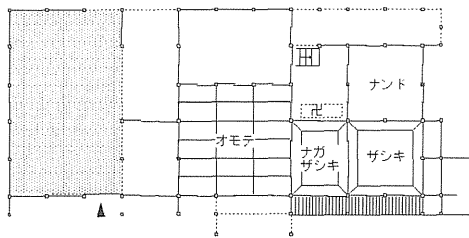


図 6-7 榎木野不羈夫家 復原平面



写真 6-5 榎木野不羈夫家 ザシキ



写真 6-6 榎木野不羈夫家 オモテ

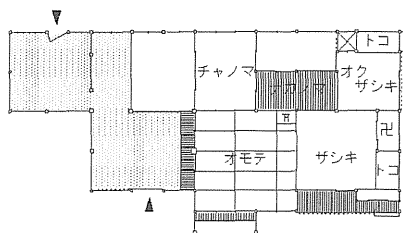


図 6-8 岩下政命家 復原平面図

現在は、この塘町筋の南に平行して大正期に通った県道が阿蘇に向かっており、この道に面して、伝統的な形式の町家が建ち並び、町並みを形成しているが、そう考えると建物の多くは道を通った大正以降に建てられた建物ということになる。

今回調査を実施したこの町並みの町家は、武田ミツ子家・U. K. 家・木野勝之家の3棟である。

武田征伍家

塘町筋が終わると、街道は北へ向かうが、その東側に大津御茶屋がある。当家はその斜め向かいに位置する。屋号は紺屋で、参勤交代の際にも座敷が利用されたと伝わる。上手に田の字型に4室を配するが、上手の街道側に玄関を開き、次の間を介して座敷に直接上がる平面としている。柱の面は大きく、角釘の使用が認められ、江戸時代後期の遺構であることは間違いない。現在二階建であるが、かつては茅葺の平屋・平入であった可能性が強い。

U. K. 家

本来武家で、明治以降も代々の当主は地主、県会議員などを歴任している。塘町筋が終わり、街道が北へ向かう曲がり角の南側に位置している。平入が多い町屋の中で、この家は妻入りである。土間に対し、上手に3列2行に計6室を配し、南側を座敷・次の間とする。玄関周りの柱はもちろん、梁や壁板にまで櫓をふんだんに使用し、床板等の座敷飾にも櫓を多用している。建設年代は、明治18年(1855)である。

木野勝之家

木野家は、屋号は木屋で、元々材木商を営んでいたという。大地主で、阿蘇にも土地をもっていたという。元は上大津に居住していたが、大正3年の豊肥線開通に伴い、商売の関係上、この地から直接阿蘇へ向かう県道沿いに移り住んだという。住宅も上大津の家を移築したと伝わる。小屋裏に残された棟札によって、明治15年の建築が明らかで、地元の大工・佐藤四郎によるものであることが判明する。また、明治34年および大正6年(1917)の家相図が残され、両図の平面にほとんど一致しているものの、明治の図では、方位や道路の位置が現状とは異なっている。このため、明治の図は移築前の状況を示し、大正6年の図は移築後の姿を描いていると考えられる。

すなわち、上大津の豊後街道に面して明治15年に建設された住宅は、大正3年の豊肥線の開通に伴い新しい道に面するより駅にも近い位置の屋敷に移ったのである。

県道に面する住宅は、入母屋造、瓦葺、平入、土蔵造の建物で、平面は、東西に3列、南北2列とする。元々街道に面していたため、上手奥の座敷へ上がるために上手表の次の間前に玄関を設けられていた。間口の大きな町家である。

以上3軒ではあるが、江戸時代以来の平入の形式が継承され、しかも武田・木野の両家で、ザシキ・ツギノマへ

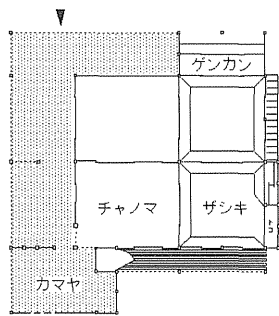


図 7-1 武田征伍家 復原平面図

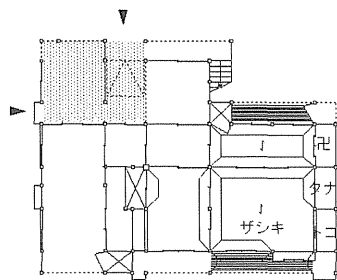


図 7-2 U.K. 家 復原平面図

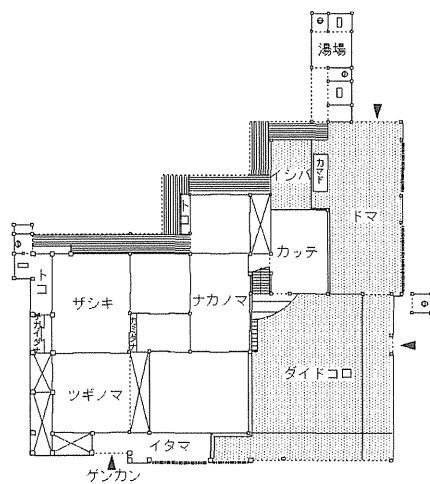


図 7-3 木野勝之家 復原平面図（移築前）

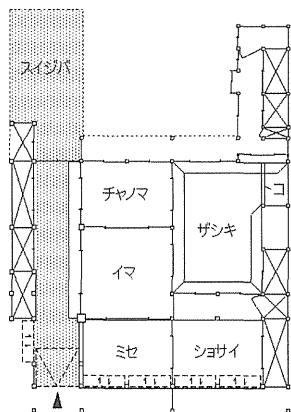


図 7-4 吉田俊一家 復原平面図

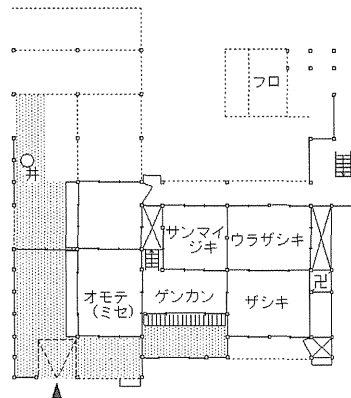


図 7-5 勝基直家 復原平面図



写真 7-1 吉田俊一家 外観

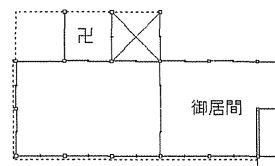


図 8-1 小糸豊寛家 復原平面図



写真 8-1 小糸豊寛家 外観

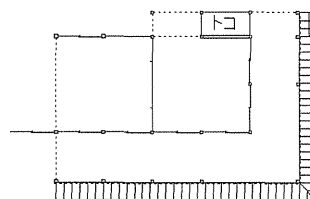


図 8-2 坂梨正章家 御居間次の間部分復原平面図

直接接続するゲンカンを街道に面して設けるといった特色がある。

7. 2 宮地、坂梨の町家

宮地町・坂梨町は、ともに郡代の支配を受ける阿蘇郡内の在町（町場）であった。宮地は、街道から北へやや入り込んだ阿蘇神社の門前町で、神具の町であった。また坂梨は、街道の宿駅で、会所・御茶屋などもあった^{注7)}。

吉田俊一家

阿蘇神社の門前町宮地にあって、昭和初期まで呉服問屋や薬屋を営んできた。屋号は和泉屋で「宮地七屋」の一といわれている。当家には明治期の鑑札が残り、これに「阿蘇大宮司家来」と記されている。

住宅は、宮地中央の十字路北東隅に建つ。土蔵造、二階建、切妻造平入、瓦葺の町家である。1間幅の通り土間に沿って2列に部屋が並ぶ。ミセ・イマ・チャノマ、上手にショサイと12畳の大きな座敷である。差物を多用し、一階正面通り側の柱と大黒柱はすべて樺材である。二階西側にも座敷があるが、この座敷西側の柱には全て当木があって、窓は小さい窓を穿つのみであるので、本来物置であったものを改造した可能性が高い。すべて洋釘の仕事で、建設年代は明治後期であろう。

勝基直家

坂梨宿の旅籠であった。屋号は坂名屋で、現在の大分県竹田市や熊本の三里木辺りまでを範囲とする運送業も営んでいたらしい。

建物は街道に面して建つ。六間取で、表側にオモチ・ゲンカン・ザシキ、裏手に四畳半とサンマイジキ・ウラザシキを配するが、これらはいずれも家族のための部屋である。座敷前の街道との間は前庭とする。客室は二階で、六畳2室と、床をもつ8畳と6畳の次の間からなり、いずれも長押を打つ。洋釘の仕事で、明治41年（1908）に、宮地駅が坂梨の橋の近くに出来ると聞いて、大型旅館に改築したのが現在の建物で、大工は同じ坂梨宿の虎屋と同じで、同宿の俵屋の大工だったという。

8. 御茶屋

江戸時代の藩主の休憩・宿泊のための施設に御茶屋と呼称される建物があった。現在、熊本に残る御茶屋の遺構としては、南関御茶屋（国指定史跡）が知られるが、その他は指図を用いた研究成果がある^{注8)}。しかし、遺構調査の点ではまだ不十分であった。

小糸豊寛家（的石御茶屋）

江戸時代の的石御茶屋の遺構である。ただし、御茶屋のうち、御居間と、通常の次の間に相当する座敷の2室を残すのみで、他は取り壊され、新築部分が接続している。現在瓦葺となったが、元は茅葺の平屋で、屋根は鍵屋であったという。御居間は、8畳に床の間と三角形平面の天袋の

付く床脇をもち、長押は打たない。

座敷は12畳と広い。元は、この座敷から直角に折れて、二列に部屋が続き、表には仏壇を正面にもつ玄関・オモチ、裏には物置・ヘヤがあって、土間があったという。角釘の使用が認められ、残された部分は江戸時代に遡る建物であることは確実である。

坂梨正章家

正式の御茶屋とは異なるために、これまであまり紹介されてこなかったのが坂梨正章家である。的石の御茶屋から内牧御茶屋へ向かう途中の狩尾にある。現在は瓦葺であるが、元は茅葺の平屋で、鍵屋である。東西に並ぶ8畳2室の東と南に一間幅の入側が囲む部分は、当に残る記録から、文化14年（1817）に藩主休息のために建てられたことが明らかである。東の8畳にはかつて北面に床が復元され、痕跡からの裏付けはないが、聞き取りによれば床の隣は神棚であったという。長押はない。床をもつ8畳を一間幅の入側が囲む形式は、南関御茶屋と同じで、同じくかつては肥後藩であった大分県佐賀関の教導寺御殿（安政5年 棟札）も同様であった。御殿は藩主の着替えの場として建てられたことが棟札から明らかである。また、近年発見された坂梨御茶屋の絵図によれば、その御居間と御次の関係はほぼ坂梨正章家と一致している。

坂梨家の南北の棟は、明治40年（1907）に建設された座敷と次の間および玄関である。座敷は15畳、次の間も12畳と広い。床・棚・付書院を備えた明治後期らしい座敷である。玄関前には、樺を用いた薬医門が建つ。これも江戸時代に建てられた可能性が高い。

以上、御茶屋の御居間・次の間部分が小糸家に、それに準ずる建物の御居間・次の間部分が坂梨家に残されていることが判明した。

9. 街道でみた民家の特色

街道は、人的、物的な交流が盛んに行われた。現在では大分県に属する鶴崎は、かつての細川家が参勤交代で利用した港であり、そこに至るまでの街道の大半は同じ肥後藩に属していたことが、さらに往き来を自由なものにしたと思われる。

大津町陣内の江藤家武紀は元来、豊後大友家の家臣だったといわれ、元禄4年（1691）没の武左衛門の代から現在地で農業を始めたというから、街道は大津の郷士住宅を準備したといえるのかも知れない。

また阿蘇神社の天保期の工事には鶴崎の大工が参加しているが、その「家来」である吉田家の建設に鶴崎の大工が関与していた。

また、波野の農家は、いずれも四国の大工との関係のうちかわせるものであった。今後、建物の技法や平面等に関する比較検討が必要である。

近代になると、街道のルートに近いところを鉄道や新たな県道が通ることになり、これが民家に大きな影響を及ぼしている。大津では、民家の移築があり、坂梨では、駅の開通やそれに伴う宿泊客の増加を見込んで、旅館の新築が行われた。

10. まとめ

以上の検討から本研究では、熊本県の民家に関する基礎資料として豊後街道沿いの民家に関する、町家、農家、郷土住宅や、藩主休息のための御茶屋などのデータを提示し、とくに大津町の郷土住宅は大型で、江戸時代に遡る上質の住宅が多く、その祖型は、近隣に存在した平行二棟造とは異なる系統の住宅であろうこと、波野の農家は、建物中央にオモテと呼ばれる大きな部屋をもつ点で、街道沿いの他地域の民家とは異なること、御茶屋に準ずる休息施設が存在すること等を明らかにした。また、街道を通じての現在では他県となった鶴崎（現・大分県）や四国などの大工の活動がうかがえ、今後のより具体的な建築技法や平面・意匠における他地域との影響関係を検討する必要が浮き彫りになった。

<注>

- 1) 松井昌幸：旧細川時代の屯田兵舎について、熊本女子大学学術紀要，5-1，pp. 77-84, 1953. 2
- 白木小三郎：近世に於ける所謂「鍵家」民家の一形成について，日本建築学会報告集，57，pp. 497-500, 1957. 3
- 青山賢信：熊本県北部地方の縦割棟民家について，日本建築学会報告集，89，p. 510, 1963. 9
- 昭和 45 年熊本県民家調査緊急調査概報 熊本県の民家，熊本県教育委員会，1971
- 太田静六：熊本県一貴重な平行二棟造，九州のかたち 民家草葺きの家を中心に，西日本新聞社，1977
- 吉田靖：日本における近世民家（農家）の系統的発展，国立奈良文化財研究所，1985
- 熊本の町並み，財団法人熊本開発センター，1982
- 北野隆・梅田彰・岡部浩志：熊本県の平行二棟造りに関する研究一緒方家住宅について一，日本建築学会九州支部研究報告，1992
- 原田聰明の研究は，日本建築学会大会や九州支部に発表されたものが数多く，例えば原田聰明：玉名郡玉東町の E 字型「三棟造り」「くど造り」について：熊本県民家に関する研究その 5，日本建築学会大会学術講演梗概集，p 937, 1991.
- 原田聰明・北野隆・梅田彰：寺院庫裡の谷樋空間の名称について：熊本県の民家に関する研究その 6，日本建築学会九州支部研究報告 3 計画，第 33 号・3，p. 393, 1992. 3
- 原田 聰明・北野 隆：宇土郡不知火町の平行二棟造り民家について：熊本県の民家に関する研究 その 22，日本建築学会九州支部研究報告集計画系，第 36 号・3，p. 381, 1997. 3 等
- 宮澤智士：日本列島民家史，住まいの図書館出版局，1989

澤村仁：民家と町並 九州・沖縄，日本の美術 290, 1990. 7
大岡敏昭：藩制と民家，相模書房，1990

- 2) 熊本県教育委員会：熊本県歴史の道調査一豊後街道一，1982
熊本県阿蘇町教育委員会：歴史の道 豊後街道 歴史の道整備活用推進事業報告書，2005
- 3) 大津町史編纂委員会：大津町史，pp. 846-853, 大津町，1988
- 4) 当藩で「在御家人」と呼称される郷土やその住宅の所在については，大津の史家・堀内研一氏にご教示頂いた。
- 5) 伊東龍一：熊本県指定重要文化財 江藤家住宅調査報告書，大津町教育委員会，2005. 5
- 6) 町家の居蔵化については，佐賀県塩田宿の場合には，寛政元年（1789）の大火後に最初の「居蔵家」が出来，その後徐々に普及したことが「天相日記」（塩田町・江口家所蔵）によって知られる。日野良一・宮本雅明・伊東龍一：肥前塩田町における「居蔵家」の町並み形成，日本建築学会研究報告 九州支部 計画系 43・3，pp. 517-520, 2004 参照。
- 7) 吉村豊雄：藩政下の村と在町 一宮町史，一の宮町，2001
八田茂樹：豊後街道坂梨宿の形態と機能，交通史研究，53，pp. 31-52, 2003
- 8) 北野隆：細川藩の御茶屋と侍屋敷，城郭・侍屋敷古図集成 熊本城，p276，至文堂，1993

<研究協力者>

木村充伸 熊本大学大学院博士課程
穴井美和 熊本大学工学部 4 年
後藤至誠 同
最所妙佳 同
宮下香奈 同
山下麻里 同